

日本「水」の会編集

事典「日本人と水」

いま水はどうなっているか

新人物往来社「歴史読本」臨時増刊号

(一九九四年六月発行)

図書紹介



長崎 明

408頁 1,800円

地球的規模での気象異変であることを否定できないが、他方では、森林を伐採して山の保水力を減らしたからだとか、都市化が進んで降雨を処理し切れなくなっただからだとか、作物の豊凶を逆手にとって「漁夫の利」よろしく、コメ輸入自由化を促進しようとの、ある種の意図があったのではないかとか、人災もまた否定できないとの論もある。まさに「行雲流水」とばかり、悠々としているわけに行きそうもない。

人々の関心が否応なしに「水」に向けられているとなれば、水に関連する図書が文字通り「水を得た」ことく氾濫するのも理の当然であろう。しかし、わが意に添うものを見出すのは難しい。学術的なものか、通俗的なものかに偏しがちである。

そういう時、ふと見付けたのがこの本である。まず、表紙の「日本人と水」という赤い文字が目飛び込んできた。続いて、現在我が国で売り出されている水ボトルの写真に気を引かれた。特にその

昨年は大変な冷夏で稲のできが悪く、農家の努力が「水の泡」と消える一方、コメ輸入自由化とのからみもあって、「ぬれ手で粟」を決め込むやからもいて、大きな社会問題になった。

今年は一転して記録破りの猛暑・日照

りが続き、ダムも川も農地もすっかり干上がってしまった。九月に入って、やっと早ばつが納まったかに見えるが、まだ四国の一部のように給水制限をしているところがあるのに、大阪府のように「寝耳に水」の集中豪雨で、府下三市の六千世帯以上が浸水したり、大阪空港の地下二階の電源室が冠水して、数時間の欠航を余儀なくされるところがあったりで、かなりチグハグな現象が生じている。

コメのできにしても「日照りに凶作なし」で、今年は大丈夫との楽観論がある一方、日照りによる減収を気にする向きもある。昨年来のこうした現象は確かに

中の一つは、懐かしくも三年前スイスアルプスのトレッキングの際、度々お目に掛かったものである。日本人は「ノンガス、ミネラルウォーター」ばかり飲んでいたが、あちらの人は「ガス入り」を好んでいようであった。そのときは水がこの写真のように我が国で売り出されるとは思ひも付かなかった。最近では我が国でも「ガス入り」が売れているとか。

手に取ってパラパラとめくって見る。巻頭言と編集後記の末尾に、「日本「水」の会」と記されている。この本の編集のために作られた会ではなからうか。巻頭言「日本人と水のかかわり」では、

日本文化は水田稲作農耕に淵源し、稲作は水に依存し、政治もまた治水・利水を大きな課題としたので、古代に

おいては権力者が水を占有していた。と書き出し、以下、主として我が国の文化と水とのかわりを歴史的に記述した後、「高度経済成長に伴って、日本における水の役割は変化した」・「水は次第に日本人の生活意識から離れていった」

・「本誌が、日本人と水とのかわりを見直すきっかけになれば、と思う」と結んでいる。

私はここで気が付いて、もう一度表紙をよく見ると、水ボトルの写真と重ねて次の文言が記されている。

いま水は／どうなっているか／これから水は／どうなるか／これまで水と／どう／かわってきたか／いのちの水／おいしい水／こわい水／自然の水／きよらかな水／めぐみの水／大切な水／役に立つ水

これらの文言に、本書の意図が凝縮されている、と思う。

更に、表紙には「事典」とある。なるほど、

- 第一部 総論
- 第二部 水と政治
- 第三部 水と産業
- 第四部 水と環境
- 第五部 水と生活
- 第六部 水と文化
- 第七部 水と信仰

上記の本文に目次、巻頭言、編集後記を加えて四百ページを越えるが、できる限り現時点での情報を網羅しようと努力した跡がうかがえる。特に第二部末尾の「上水史年表」・「下水道史年表」・「水害年表」、第五部末尾の「水にまつわる故事・ことわざ」、第七部末尾の「川の言い伝え」・「水の祭り」・「水の行事」などは、学術論文を書く時にも、日常の会話の中でも、有効に利用することができよう。因みに、本稿の前半に用いたことわざは本書から引用させてもらったものである。

学校の先生が、生徒たちに教える時、あるいは共に語りあう時、本書の情報は威力を発揮するに違いない。水に関する常識を一まとめにした図書、机のうえに常時置いておいても邪魔にならない図書という程度で紹介するものである。

(ながさき あきら) 〓

本研究所理事長・新潟大学名誉教授)